

第8回日本胸部外科学会会長当時の思い出

第8回 会長 長 石 忠 三

私が第8回日本胸部外科学会をお世話したのは、今から22年前、すなわち、昭和30年10月のことである。敗戦後すでに10年経ってはいたが、物質的には何かにつけてまだまだ不自由な時代であった。

前年度の総会、すなわち、昭和29年10月の第7回総会で思いがけず次期会長に推された時、私は、会場をみつけることなどに苦勞するとは思ってもいなかったが、さて物色してみると、思わしいのがみつからなくて閉口した。

当時は国立京都会館はもちろんのこと、市立京都会館すらも出来ていなくて、京大内の大講堂も、学期半ばの時期のこととて、3、4日間ぶっとうして借りることはできなかった。

あちこち物色して、ようやく京都府立医大総合講堂と、もう一つ電車を距てた向う側の立命館大講堂とがみつかった時には、正直に言ってホッとした。

当時はまた、時々停電があって困る時代でもあった。開会後間もなく、とつぜんあかりが消えたのでしまったと思ったら、1、2分でパッとあかるくなってホッとした。もしも2、3時間もあかりがつかなかったら、プログラムがめちゃめちゃになっていたに相違ない。その点運がよかったと思う。

当時のプログラムをみると、紙の質も悪く、活字もパットしない。私どもの当時の研究室も現在と違って古色蒼然たる木造の1階建てで、物質的には何もかも不自由な時代であったが、私自身を初め教室の人達は当時はまだ揃って若く、何かにつけて張り切っていた。

昭和30年は、胸部外科学会の会長だけでなく、結核病学会の特別講演「空洞切開術を中心とする肺結核の切開排膿療法」や、循環器学会の宿題報告「肺循環、静脈血混合を中心として」も当たっていたし、かたわら青柳安誠先生の日本医学会特別講演「肺結核の外科的療法」のお手伝もしなければならなかったので、何かと忙しく、あわただしく過ぎた1年であった。

胸部外科学会の会員数は、現在は5,000名弱であるが、当時は学会の直前で2,358名、直後で2,700名であった。

当時までは、胸部外科学会が2日、麻酔学会が1日というように、これらの二つの学会が同一の土地・会場で会長を異にし相前後して開かれていたが、前年度の総会の様子からみて、両学会とも2日や1日では到底演題をこなさきれないと思われたので、麻酔学会会長の京大青柳安誠教授（のちに名誉教授）に御相談して、胸部外科学会は2日半、麻酔学会は1日半というように、それぞれ半日あて会期を延長することにした。この方針に従い、麻酔学会は10月13日と14日の午前とに、胸部外科学会は14日の午後から15、16両日にかけて開催された。

学会の運営は、慣れぬこととて、うまくいかなかったかも知れないが、私が今でも心秘かに誇らしく思っているのは、昭和30年10月の第8回総会を境にして、設立以来肺外科学会といってよい内容のものであった胸部外科学会を名実ともに胸部外科学会といってよいものに変えたことであり、意識的にその梶取りをしてその目的を達したことである。

招請演説として、心臓直視下手術の基礎と臨床（演者：木本誠二東大教授および榊原任東京女子

医大教授；特別発言：小沢凱夫阪大教授（以下すべて当時の肩書）、肺切除術後の胸腔に関する問題（演者：伊藤健次郎千葉大河合外科講師）、化学療法後の遺残肺病巣に対する切除術の適応（演者：香川輝正国立宇多野療養所外科医長；特別発言：藤田真之助東京逋信病院呼吸器科医長）、肺化膿症の外科（演者：名倉茂東京医大篠井外科助教授；特別発言：青柳安誠京大教授）、肺結核病巣の位置診断（演者：塩沢正俊結核予防会結核研究所外科医長；特別発言：河合直次千葉大教授）などを採り上げ、ことに心臓直視下手術については基礎と臨床というように、題目に臨床なる文字をつけて、とくにその臨床を半ばおしつけの形で、木本、榊原両教授にお願いした。開心術はまだ1、2例しか行われていなかったが、この時を境にして目覚ましく進歩発達した。

また、シンポジウムとして気管支肺胞系異常拡張症の外科（司会：長石忠三京大教授；シンポジスト：熊谷直東北大抗研助教授、本多憲児東北大外科助教授、佐藤陸平神戸大外科助教授；特別発言：鈴木千賀志東北大教授を採り上げた。

その他、部会として、肺切除術後の合併症部会（座長：宮本忍国立東京療養所外科医長）、肺切除材料の検討部会（座長：加納保之國療晴嵐荘外科医長兼慶大客員教授）、肺癌の外科部会（座長：篠井金吾東京医大外科教授）、心肺機能部会（座長：笹本浩慶大内科助教授）を採り上げ、討議を盛んにして頂くようにお願いした。

また、一般演題についても、欧米に比べて比較のおくれていたと思われる方面に重点をおいて演題を採択、按配し、当時私達自身最も力を入れていた肺結核外科の演題を極度に制限し、これらについては肺癌の外科や心肺機能とともに部会の方で討議して頂いた。鈴木千賀志教授から“肺結核外科をいじめましたね”といわれたほどである。

集まった一般演題166題のうち、89題を総会の演題、53題を部会の演題として採り上げ、残りの24題をやむなく誌上発表にした。

当時はまだプログラム委員会を作ってセレクションする慣習がなかったので、私は、夏休みをとって、助教授、講師、助手の人達と南紀の勝浦温泉へ3泊して、演題の公正な選択やプログラムの編成につとめた。

若人達には、昼間の釣りや泳ぎや昼寝など自由にして貰い、私は一人で風通しのよい広い日本座敷で下着1枚になって会員各位から送られてきた演題抄録を3回よんでA、B、Cの記号をつけ、夕方から彼らに分類して貰ってプログラムを編成した。夜は夜で酒をくみかわしたり、麻雀をやったりしてみんなそれぞれきままに夏休みを楽しんだ。

今、私は、年末から家内と二人、足腰の痛いもの同志で、ここ南紀の勝浦温泉へ来て、のんきに保養しつつ、12月末メ切のこの依頼原稿を書き始めている。そして、ペンをとりつつ、ふとこの地はかつて第8回日本胸部外科学会のプログラムの編成に来たことがある思い出の地であったと気付いたわけである。

あれから22年。20年といえば、個人の人生にとってはもちろんのこと、学界で何かをみなで企てる場合でも、かなり纏った仕事が出来、一つの時代を画すことさえ出来る年月である。

事実、肺外科は、昭和20年からの20年間、その直前の準備期間を加えた25年間でほぼ出来上り、心血管外科はこれに10年おくれ、昭和30年からの20年間、同じく準備期間を加えた25年間で世界的水準に達し、現在ではともに実地臨床的に広く一般化されている。

あの当時、若くてアクティブであった人達は、今やわが胸部外科学会をそれぞれ一身に背負って立つ頼もしい方々へと成長されているが、当時何らかの意味でリーダーであった方々は、今はほとんどすべて定年退官されており、河合直次、福田保、都築正男、武藤完雄、友田正信、篠井金

吾，高橋喜久雄の諸先生方を初め，わが国の胸部外科の発展に尽くされた懐しい方々は今や世に亡き人々である．あのお元気だった青柳安誠先生も昨年末病床に臥しておられ淋しいことである．

学会運営も今とその当時ではすっかり様相が変っている．あの当時は，私ども会長は，モーニングを着て威儀を正し，部会ではそれぞれの座長に司会を一任したが，総会場では会長自身がすべての演説の司会を自身でしなければならなかった．

私の京大での当時の教授秘書であった中川艶子さん（現毎日新聞社上谷治夫夫人）は，会長席の斜め後のカーテンの陰に椅子をおいて，私と会場との間の連絡役をつとめて下さったが，長時間のこととてかなり退屈であったとみえて，私の手許へしきりにジュースを運んで来たり，私のテーブルへ時々メモ用紙を廻して来られたりした．何の用かともてみると，“今の演説はとても立派でした．会長先生！感謝状をあげる時に出来るだけ賞めてあげて下さい．”などと書いてあった．茶目な彼女の目にとまった方々の中には，たしか招請演説担当者の榊原任，塩沢正俊両博士のお名前もあったように記憶している．颯爽としていて，若い娘の心に訴える何ものかがあったのであろう（昭和51年12月末日）．

京都大学名誉教授